

公的場面における婉曲表現

—議会会議録の「～ふうに＋思考動詞」を例に—

山際 彰^{やまぎわ ちやう}* (関西大学^{ほか})

yamagiwa_mk2@yahoo.co.jp

1. はじめに

近年、方言研究では言語発想法の地域差が注目され、音韻や語彙といったレベルを超えて表現レベルでも地域差の見られることが注目されている（沖 2009, 久木田 2009, 小林・澤村 2014, 小林編 2018）。これらは、主に日常的な（あるいはそれに近い）場面における言語実態を分析したもので、いわば私的場面を対象としている。一方で、公的場面でもこうした言語発想法の違いによる表現の差異が認められるのかどうかは十分に検証されていない。

そこで、本発表では議会において多用される婉曲表現の「～ふうに＋思考動詞」を取り上げ、公的場面にも言語発想法の違いに基づく表現の差異が見られるのかについて考察する。

2. 分析の手順

本発表では、小林・澤村（2014）の（1）の記述に注目し、婉曲表現を取り上げる。すなわち、直接的に言うのが「東日本的・周辺の」、間接的に言うのが「西日本的・中央的」であるならば、婉曲表現は後者で出現しやすいのではないかという予測が立つためである。

（1）本章では、直接的に言うか間接的に言うかという観点を取り上げた。相手に何かを働きかけるときに、自分の意志や心情、あるいは疑問などをストレートに表現するか、それともそうした露らわな表現は避けようとするか。〈略〉いくつかの事例を観察するかぎり、いずれも前者が東日本的・周辺のであり、後者が西日本的・中央的であった。（小林・澤村 2014 : 94）

そして、婉曲表現の具体的な形式として「～ふうに＋思考動詞」を取り上げる¹。これは、同表現が本発表で扱う議会会議録で多用されることが既に指摘されているためである（調査資料に議会会議録を用いるのは、言語量が豊富で、かつ経年的な調査および地域差の分析に耐えうることによる）。「～ふうに＋思考動詞」とは、（2c）のような表現である。

（2a）その説明はおかしい。

（2b）その説明はおかしいと思います。〔≒その説明はおかしいだろう。〕

（2c）その説明はおかしいというふうに思います。（いずれも作例）

* 本発表は、JSPS 科研費 18K00632 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」による成果の一部である。なお、本文の引用・挙例における下線・波線・強調表示などはいずれも筆者による。

¹ 本発表で扱う思考動詞は「思う」「考える」の二語に限定し（語の選定は渡辺 2014 を参考にした）、「～ふうに」の前接要素を引用句「という」を含むもののみを調査対象とした（＝「{つて/というふうに} + {思う/考える}」）。

(2a-c)はいずれも命題は共通であるが²、発話態度が異なる。(2b)は命題に思考動詞「(と)思う」が付いた形で、話し手の判断を示す表現である。(2c)は(2b)に〈様子〉を表す名詞「ふう(風)」が付いた形で(2b)と同じく話し手の判断を表すが、「ふう(風)」を取り除いても論理的な意味の差異は特に認められない点で、(2b)よりも婉曲的な表現である。すなわち、(2b)と(2c)は(2a)のような断定を避けた言い回しという点では共通しており、違いは婉曲度合いが弱い強い点にあるといえる。本発表では、前者と後者の使用量のうち、後者の使用率が高い地域ほど、その地域が間接的表現を嗜好すると考える³。

ところで、同表現の使用実態は、国会会議録における「補文+という{ように／ふうに}思います」を調査した渡邊(2010)に詳しい。同論文は、国会会議録の「補文+思います」と「補文+という{ように／ふうに}思います」を比較して、後者の使用率が時代の推移とともに上昇することを指摘している。ただし、分析の対象となっているのが国会会議録に限られるため、同表現が議会のような公的場面においてのみ多用されているのかどうかは明らかでない。そこで、まずは「～ふうに+思考動詞」が公的場面に特有な表現だといえるのかを確認し(=3.)、その上で同表現の全国各地の使用状況について見ていきたい(=4.)。

3. 時代・資料別に見る「～ふうに+思考動詞」

「～ふうに+思考動詞」は近代から見られ、昭和半ば頃以降に多量の用例が見出される。〈様子〉を表す名詞「風(ふう)」は近世から見られるものの⁴、「～と{思う/考える/存ずる}」といった文末思考動詞の発達が近代以降であるために(渡辺 2007)、近代の時点ではまだ「～ふうに+思考動詞」が一般的ではないのだと考えられる。そのため、近代には用例はあまり見られないが、特に小説類にその傾向が顕著である。また、用例の大半が「指示詞+ふうに+思考動詞」の形であり、引用句を伴って用言やコピュラに続く例は限られている。また、現代には稀である「～ようなふうに+思考動詞」という用例の存在も、「～ふうに+思考動詞」が十分に定着していないことを反映していると見られる。

² この点について、森山(1992)では次のように述べている。

(あ) 主観明示用法での「と思う」は、「主観」を「明示」するだけであって、取り除いても論理的知的な意味での質的な違いはないのであった。むしろ、文体的問題として、個人的な意見をそのまま主張することが憚られるような場合(公的な文体など)でよく見られる用法である。(森山 1992: 113)

³ 森山(1992)は「～と思う」に「不確実表示用法」(不確実であることを表示する用法。例: 「あいつ、大学、来てるかな」「はあ、来てると思います。」)と「主観明示用法」(話し手自身の個人的な意見であることを明示する用法。例: 日本の今の医療制度は間違っていると思う。)の二つの用法を認め、その共通点を「個人情報の表示」に求められるとする(森山 1992)。

(2b)は後者に当たるが、前者に当たる例も(う)のように「～ふうに+思考動詞」との置き換えが可能である。これら二つの用法のどちらが使われやすいかが地域によって異なるかどうか問題になるが、本発表ではこれらを一括して扱う。

(い) 確か、その日は日曜日だったと思う。(=森山論文(15))

(う) 確か、その日は日曜日だったというふうに思う。(作例)

⁴ 『日本国語大辞典 第二版』(2000-02)では、「やり方。様子。」を表す「ふう(風)」の早い時期の例として、「こいつもある風(フウ)なせりふだとは思ったけれども」(深川新話 1779)や「三文花を十文買って四文銭七文置く風だ」(浮世床 1813-23)といった近世の例を挙げる。

(3) それがため他人の嫁入沙汰を聞いても他人は他人、自分は自分の運命があるとい
う風に思って、結婚などをする自分ではないと堅く信じていた。

(私の貞操観 1911[青空文庫])

(4) 転じて腰巻きと上着とを以て身体を覆ふ様な有様と成り、漸次付属物が増して来
たので有らう、と云ふ風に考へるのが、衣服変遷の推理的研究でござります。

(太陽・事物変遷の研究に対する人類学的方法 1895[CHJ])

(5) そして今迄とは全く別な考へに移つて専ら神秘的思想に耽り、何も斯も今迄の事
は神の聖旨に叶はない様な風に思はれて不満足と煩悶の情に堪へなかつた。

(太陽・露国写真主義の創始者(ゴーゴリの誕辰百回紀に際して) 1909[CHJ])

これが現代になると、多数の用例

表 1 国会における婉曲率の推移

が確認されるようになる。近代と
は異なり、引用句を伴う「～ふう
に＋思考動詞」の用例が容易に見出
せる。「～ふうに＋思う」を例にと

	1955 年	1975 年	1995 年	2015 年
～ふうに思う	39.5%	47.1%	43.8%	46.2%
～ふうに考える	6.8%	32.9%	39.8%	42.7%

ると、BCCWJ では「～ふうに＋思う」のうち、引用句を伴う例は全体の約 8 割に当たる (3025 件中 2346 件)。ここから、近代～現代にかけての用法の変化が見て取れる。上記のような展開を示す一例として、国会会議録における「～というふうに＋思考動詞」の推移をまとめたものが表 1 である。なお、表中の数値 (%) は「～というふうに＋思考動詞」÷ (「～と＋思考動詞」＋ (「～というふうに＋思考動詞」) ×100 で算出した (以下、婉曲率とする)。表 1 から「～というふうに思う/考える」ともに 1955-75 年に急増し、その後は「～というふうに思う」が漸増、「～というふうに考える」がほぼ横ばいという推移を経ることがわかる。そして、現代では文末思考動詞を付与する言い方のおよそ半数が「～ふうに」を伴うという結果を示している。一方、近代と同様に小説類に用例が少なく、「～ふうに思う (3025 件) /考える (2423 件)」ともに用例の約 9 割が国会会議録中の例であった。BCCWJ のうち、国会会議録の占める割合が 5%程度であること踏まえると、その偏りの極端さが窺える。

(6) そういう意味でも、自分の程度っていうのはいつでもわきまえていないとなつて
いうふうに思います。

(Weekly ぴあ 2004[BCCWJ])

(7) 第一審二千四年十月一日、第二審二千五年三月三十日、ともに原告が敗訴したと
いうことでありますが、恐らく最高裁に上告されるだろうというふうに思われ
るんです。

(国会会議録・法務委員会 2005 ; 辻議員[BCCWJ])

4. 地域別に見る「～ふうに＋思考動詞」

では、同表現の地域別の使用率の差を確認する⁵。『ぎ～みる - 都道府県議会会議録検索シ

⁵ 地方議会議員は必ずしも自身が所属する議会の地域出身であるとは限らない。しかし、竹安 (2004) が挙げる地方議会議員の出生地と現在の居住地のデータを元に計算すると、約 9 割の議員の出生地が現在の都道府県議と一致する。よって、本発表では「議会の地域＝議員の出身地域」と仮定して分析を進める。

システム』に収録されている 2015 年 4 月-2019 年 3 月の 47 都道府県議会会議録（本会議）を調査したところ⁷、各都道府県の「～ふうに＋思考動詞」の平均使用率は 9.2%であった（表 2）。

北海道・東北地方では、全体的に使用頻度が低い。北海道・青森県・岩手県が全国平均を大きく下回るほか、秋田県・山形県・福島県も割合は低い。宮城県は上位 7 位の使用率を示すが、これは知事の村井氏が同表現を多用していることによる。関東地方でも同表現の使用頻度は低い。全国平均よりもやや高い群馬県を除く全ての県（都）で、全国平均を 5%近く下回る。中部地方における使用頻度も低め～並程度に留まる。山梨県では使用率が 1%を切り、新潟県・愛知県も使用率は低い。長野県が例外として高い数値を示すが、その要因が知事の阿部氏による同表現の多用である点も上述の宮城県と同様である。四国地方でも全体的に使用率が低い、四国の中で人口の多い香川県・愛媛県の方が高知県・徳島県よりも使用率が低いという結果であった。

（8）私も子供を育てた経験から、幼児教育と
いうのは非常に重要だろうなというふう
に思っております。

（宮城県議会会議録・定例会 2018；村井議員）

（9）もちろん微力ですけども、私も力を尽く
したいというふうに考えております。

（徳島県議会会議録・定例会 2017；岸本議員）

一方、近畿地方は並～高めの数値を示している。和歌山県・京都府・滋賀県が全国平均よりもやや高めの使用率であるのに加え、三重県が非常に高い数値を示している。ただし、宮城県・長野県とは異なり、知事など特定の人物の発言が集中しているわけではなく、複数の人物が多用している点が特徴的である。中国地方では、使用率の高い県と低い県の差が顕著で、鳥取県・島根県では使用率が高く、山口県・広島県では逆に使用率が低い。九州地方も同様で、使用率の高い佐賀県・大分県・熊本県に対して、鹿児島県・宮崎県・福岡県では極端に低い。いずれも当該地域の中で人口が多い県で使用率が低いという点で共通している。

表 2 全国の婉曲率⁶

都道府県	婉曲率	都道府県	婉曲率
北海道	0.5%	滋賀	12.1%
青森	0.5%	三重	24.0%
岩手	0.3%	京都	12.2%
秋田	1.0%	大阪	7.1%
宮城	14.9%	奈良	6.6%
山形	3.1%	和歌山	10.1%
福島	2.4%	兵庫	5.9%
茨城	1.1%	岡山	11.6%
栃木	0.0%	鳥取	15.4%
群馬	13.4%	島根	12.9%
千葉	5.4%	広島	0.2%
東京	1.1%	山口	5.6%
埼玉	3.2%	香川	0.7%
神奈川	4.9%	徳島	6.3%
山梨	0.2%	高知	8.4%
新潟	4.8%	愛媛	1.5%
富山	5.7%	福岡	4.4%
石川	9.2%	大分	15.7%
長野	29.8%	佐賀	16.8%
岐阜	9.1%	長崎	9.4%
静岡	11.3%	宮崎	1.9%
愛知	4.0%	熊本	15.3%
福井	10.9%	鹿児島	0.0%
		沖縄	13.2%

⁶ 太字は平均値よりも 3.5%高い数値、斜体は 3.5%低い数値であることを示す（表 3 も同様）。

⁷ 『ぎ～みる-都道府県議会会議録検索システム』については乙武ほか（2018）を、同システムの構築を含めた近年の地方議会会議録研究の動向については高丸（2019）を参照。

(10) 観光は、総合行政だというふうに思います。

(和歌山県議会会議録・定例会 2017；藤本議員)

(11) また、農山漁村地域の活性化にも効果が高い取り組みだというふうに考えております。

(佐賀県議会会議録・定例会 2015；井上議員)

ここで、中央的か周辺的かという観点に関して、人口別の婉曲率に注目することでこれを確認する。**表 3** は人口の上位・下位 10 都道府県の婉曲率を示したものである。先述の通り、婉曲率の全国平均は 9.2%であるため、中央的な地域（人口が多い都道府県）はこれを上回ることが予想されるが、実際にはこれを大きく下回る。周辺的な地域（人口が少ない都道府県）も全国平均をやや下回るが、内実は異なり、婉曲率の高い県と低い県が混在している。この結果を四国・中国・九州地方では同じ地域内でも人口の多い都道府県ほど婉曲率が

表 3 人口別婉曲率

人口	都道府県	婉曲率	人口	都道府県	婉曲率
1	東京	1.1%	38	秋田	1.0%
2	神奈川	4.9%	39	香川	0.7%
3	大阪	7.1%	40	和歌山	10.1%
4	愛知	4.0%	41	佐賀	16.8%
5	埼玉	3.2%	42	山梨	0.2%
6	千葉	5.4%	43	福井	10.9%
7	兵庫	5.9%	44	徳島	6.3%
8	北海道	0.5%	45	高知	8.4%
9	福岡	4.4%	46	島根	12.9%
10	静岡	11.3%	47	鳥取	15.4%
平均		4.8%	平均		8.3%

低いという先述の結果と合わせると、人口の多い都道府県は婉曲率が低く、少ない都道府県は婉曲率が高い傾向にあり、前者の方が顕著に現れているといえる。

5. 場面による言語発想法の差異

上記の調査結果から、議会会議録という公的場面におけるやり取りを反映した資料でも、言語発想法の違いに基づく表現選択の差異が窺えることが明らかになった。ここで、本発表の調査結果と小林・澤村（2014）の“直接的表現（ストレートな表現）を好むのが東日本的・周辺的であるのに対し、間接的表現（露わな表現の回避）を好む西日本的・中央的である”という指摘の関連性を確認する。「～ふう」に「＋思考動詞」は西日本で多用されやすく、東西の差については共通性が窺える。一方、中央的という点に関しては合致しているとはいえない。都市圏の「～ふう」に「＋思考動詞」の使用率は、東京都（1.1%）、大阪府（7.1%）、愛知県（4.0%）、福岡県（4.4%）となっており、47 都道府県の平均値（9.2%）を大きく下回る。そのため、こうした傾向差を公的場面にも適応させてよいのかは検討の余地がある。

そして、地方議会内における場面差について取り上げておく。地方議会は本会議と委員会とその内実が異なる。本会議は用意された原稿の読み上げを中心とする答弁であるため、定型かつ方言的要素の出現が限定的である。委員会も原稿の読み上げ場面は同様であるが、再質問の場面では（想定問答が用意されているとはいえ）その場で議員が答弁に応じるため、本会議の場に比べると非定型かつ方言的要素の出現も多分に期待される状況である。例えば、本発表の調査では鹿児島県に「～ふう」に「＋思考動詞」が見られなかったが、鹿児島県

議会会議録で別途用例を確認したところ、(12) のような例が散見された。管見の限り、用例が僅少ではあるものの、「～ふうに＋思考動詞」の使用率が 0%であった同県においても用例が確認されるという事実は、議会での性質の差として注目すべき点である。

(12) 一体この事業の当初見積もりと二十九年度の執行体制というのは何だったんだ
というふうに思うんですけど、内容的には、これは介護施設に対する助成事業で
すかね。(鹿児島県議会会議録・企画観光建設委員会 2018 ; 持富委員)

6. おわりに

以上、本発表では公的場面における言語表現の地域差について考察する足掛かりとして、議会会議録を主資料に、そこに見られる「～ふうに＋思考動詞」という婉曲表現を分析した。その結果、(I) の点を確認した上で、(II) を明らかにした。他の事例の観察・比較や、地方議会会議録の資料性の検討については今後の課題である。

(I) 近代に見え始め、昭和半ば以降に多用されるが、その使用は議会会議録に偏る。

(II) 近畿/中国地方に多く、東北/関東/四国地方に少ない。また、人口の多い都道府県ほど使用率が低い傾向にある。これを私的場面で間接的表現を好むとされる地域と比較すると、東日本的・西日本的という尺度では概ね一致するが、中央的・周辺のという尺度では一致しない。

調査資料【*1 はコーパス検索アプリケーション『中納言』[Ver. 2. 4. 4] を、*2 は全文検索システム『ひまわり』[Ver. 1. 6. 2] をそれぞれ検索の際に利用した】

日本語歴史コーパス (CHJ) [Ver. 2019. 03]*1、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) [Ver. 1. 1]*1、青空文庫パッケージ 20180401 版 (すべて)*2、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ【新聞記事文庫】<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/> [2019/08/19]、国会会議録検索システム <http://kokkai.ndl.go.jp/> [2019/08/24]、ぎ～みる～都道府県議会会議録検索システム http://local-politics.jp/47pref_2015-2019/#/ [2019/12/30]

参考文献・URL【文献の副題は省略した。URL の最終確認日はともに 2021/03/27】

沖裕子 (2009) 「発想と表現の地域差」『月刊言語』38、乙武北斗ほか (2018) 「一般公開版「都道府県議会会議録検索システム」の概要」『人口知能学会第 32 回全国大会論文集』、久木田恵 (2009) 「方言談話における会話方法の地域性」『月刊言語』38、小林隆・澤村美幸 (2014) 『ものの言いかた西東』岩波書店、小林隆編 (2018) 『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房、竹安栄子 (2004) 「地方議員のジェンダー差異」『現代社会研究』7、高丸圭一 (2019) 「地方議会会議録コーパスと地方議会会議録を用いた学術研究の現状」『知能と情報』31-2、森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞「思う」をめぐる」『日本語学』11、渡邊ゆかり (2010) 「国会会議の発言中に現れる意向・意見・見解表明文の変遷」『広島女学院大学国語国文学誌』40、渡辺由貴 (2007) 「「と思う」による文末表現の展開」『早稲田日本語研究』16、渡辺由貴 (2014) 「帝国議会会議録における文末思考動詞」『早稲田日本語研究』23、鹿児島県議会 会議録の検索 <http://www.pref.kagoshima.dbsr.jp/index.php/>、地方議会会議録コーパスプロジェクト <http://local-politics.jp/>